

1 恋果て止めて

こい は て と め て

まにふいくみやほか **Fukapon**

「だ、ダメだよっ、桐子っ」

「何がダメなの？ こんなに気持ちよさそうな顔してるのに」

秋深まる中、暑くもなく寒くもなく、心地よい日の光が降り注ぐ屋下がり。

無味乾燥だけど、開放的なその平面に、彼女たちはいた。

「だ、だって、そんな、私……」

「ハッキリ言わないとわからないなあー」

彼女たちの視界には、彼らと高くなった空だけが映り。

それはまるで彼女たちだけの世界のようにだった。

「桐子が、その、えっと、その……。とにかくダメっ、そこでストップ！」

「なによ、私の身体を借りておいて、賃借料を払わない気？」

南ヶ丘高校普通教室棟の屋上では今、ちょっととした惨事が起こっていた。

とは言え、惨事だと思っているのは膝の上にいる女の子一人と言った様子だが。

「うー、そんなこと言う桐子嫌いだよ」

もう一人の女の子の膝の上に座り、寄り掛かるようにして身体を預けている女の子。佐川綺月、高校一年生、十六歳。身長こそ並よりも高いが、華奢な体つきと幼い顔立ちで、身体の預け先である女の子とは先輩後輩のように見える。ウェーブのかかったダークブラウンのセミロングヘアが、他とは不釣り合いに大人っぽい。だから余計に、背伸びしたい盛りの可愛い子に見えてしまうのかも知れない。

そんな彼女が、ちょっとふくれた面で駄々をこねているとしたら。それは相当に可愛くて、もっともっと悪戯したくなってしま

う。

「ふうん、じゃあ、バイバイ。ほら、どこか行きなさい」

もう一人の女の子は胸に抱えた綺月から手を離し、しゅしゅと振って追い払う動作を見せている。そして自由になったはずの綺月を見下ろしながら、にやにやしている。

森田桐子、高校一年生、十六歳。よもや綺月の同級生とは思えない、幼い丸みとはとうの昔に決別した身体を持つ美少女。研ぎ澄まされた顔と背中までまっすぐ伸びた黒髪も手伝って一見清麗な風姿だが、どうにも似つかわしくないのは綺月を取めたその胸である。取めたという表現が適切な絵を作るそれは、人並み外れて豊かだった。それ故に心地よく、同性の綺月ですら離れがたいものらしかった。

「わ、わかったよお。桐子の好きにしているから、ね、もう少しこのままでいさせて」

「やたっ。じゃあ、好きにしちゃうっ」

桐子の両腕は再び綺月を抱き、胸が頭部を飲み込んだ。綺月は桐子の胸の中で顔をふるふるっとさせると、温かくふんわりとした、薄目がちの表情になっている。

しかしその頬が薄く紅で染まりだしたのは、心地よさのためだけではなからう。綺月の身体の上では桐子の右の掌がゆっくり、ゆっくりと、這い出していった。

「……んっ」

ブレザーの冬服をまとった彼女の、数少ない露出部。頃から顔の輪郭をゆっくりとさすり、細い指は首筋をすうっと舐めた。

「いあんっ、くすぐりたい」

「そう？ その割には気持ちよさそうな顔だよお？」

桐子の手は止まることなく、指先はまるで生き物であるのかのように貪欲に動き続けた。

首筋を下るとブラウスの衿の保護を無視して、迷いなく、けれども遅々と襟元に指を差し込む。薬指、中指、人差し指がゆっくりと、綺月の左鎖骨に触れた。

(んふうっ、だ、だめだよ、桐子、やめてよ……)

ただ触られているだけなのに綺月はどうにも落ち着かず、拒否しようかとも思った。けれども、桐子の指を受け入れたいと主張する身体が、主の言うことを聞いてくれない。

三本の指先は綺月の身体に聞いたかのように、ためらうことなく身体を中心へと下り、鎖骨の合間をゆるりとなでて、正確な調子で徐に右鎖骨を上る。そのまま指先が肩の辺りまで辿り着くと、桐子は潔くブラウスから手を引き抜いてしまった。

(えっ、やめちゃうの……？ って、私、何言ってるの……)

桐子に悪戯されているときだけに生ずる感覚。嫌だけれども、もっとして欲しい。けれども、その感覚の理由から目を背け、多くを求めることは綺月にとってできぬ事だった。だからいつも、こうして黙ってしまうのが精一杯で、黙って期待してしまう自分に嫌悪を覚えてはいた。

(そうだよ、いけない、こんなの。だって)

「ひゃっ」

しかし突如戻ってきた指が彼女の左胸の頂点に触れたとき、脆弱な抵抗は瓦解してしまう。

「……はうっ」

中指の腹がぐにゆりと、敏感な部分を保護するカップの頂点を押し撫でる。

「……ふうっ」

突然に、不定期に。

徐々に撫でられる奥が、小さな先端が鈍く張り詰めていくことを綺月は認識していた。なんだか、気持ち悪い。自分のものが異物へと変貌を遂げていく。もう一度でも擦られたら、そのまま持つて行かれてしまうのではなかるうかと思えるほど、しこりきつている。

彼女の胸の上では、淡いピンクのブラウスと、ランプブラックのブレザー間で、乳白色の手が艶めかしく蠢く。けれどもこの行為が背徳なものであるとわかっていた綺月に、瞳を開き、その状態を視認するだけの勇氣などなかった。故に。

「あっ……んふうっあ」

突如、スカートのベルト上を、桐子の左手が撫でることを予測するなど不可能だった。突然の触覚に堪らず、ついには誘うかのような深い吐息を吐いてしまう。

一方の桐子も、なんと反応されようが、もうやめようなどとは思っていない。何にせよ、彼女が不快な思いをしていない自信もある。自分自身の身体でよく知っているのだから。最初は軽い悪戯だった、けれども、その先を見てみたかった。

(こんなに可愛い子が、目を潤ませて、私を求めている)

もう、悪戯の域を出ていると頭では理解している。桐子も、綺月も。

「ああっ、いああっ、はう」

しかしブラウス、そしてブラジャー越しに押しつぶされる突起の感覚に身体は支配され。心の声にすら決してしないが、甘い刺激を受けた瞬間のじんと腰に響く感覚は、次を待ちわびてしまう。

そんな綺月から返ってきた嬌声に思考は麻痺し。桐子ももう、止められない。

頂点を拉いでいた中指が、すっと山を下り、カップを掌が包む。ゆっくりと、けれども形が変わるほどに乳房を揉み動かすと、さっきまでとは違うとろりとした緩い快感が綺月の身体を覆い尽くす。

「んあっ、あんあっ。あっ、だえっはっ、んふあっ」

さらに、つーつと太ももを擦り上がってくる、ひんやりとした指先。

桐子の左手はいつの間にかスカートの裾に移り、じりじりと、確実に右の内股を舐めていた。この先侵入を阻むものは、本来外敵からの保護用などではない、心許ない布地一枚だけだ。

「あっ、い、いやっあんっ」

次にどうなってしまうか、身体が勝手に求めてしまう。綺月がどうしたくても、もう声すら抑えられない。紅潮した肌が、艶めかしい声も、もっと欲してしまうばかりである。

そんな彼女を見て、桐子もいよいよ抑えが効かなくなっていた。「ふふっ、綺月ったら。もっと気持ちよくしたげるね」

言葉こそ余裕に振る舞ったが、左腕は極度の緊張に囚われている。彼女の方こそ、この先を渴望していた。

今までの焦らすような動きではなく、ついには一気に指が舐め上げ、太ももの付け根からショーツの縁へと指をかける。刹那。

「んあっ、はあはあはあっ、も、もうっ。やっぱりやだよ。桐子のバカあーっ！」

縮みきったバネが放たれたかの如く、綺月は桐子の身体から離れた。

「あっ、ちょっと、待ちなさいよっ」

「待たないっ、知らないっ、もう、桐子なんてっ。バカあー！」

彼女を抱いていたときのまま鳶座りで腕を伸ばしてくる桐子を背に、綺月は走り出す。広い校舎の屋上とは言え、綺月はものの数秒で屋上唯一の構造物、出入り口に到達。扉の向こうへと足を踏み入れていた。

「あー、こらー、逃げるなっっ」

そして桐子の叫びは重たい鉄扉に阻まれて、綺月に届かなかったらう。

「もう、何よっ。ちょっと悪戯しただけじゃない」

瞳をとろんとさせた彼女は、十数分前、事が起こる前と全く同じ姿勢でそこに座っていたが、今やへたり込んでいると言った方が相応しい具合。けれどもふくれているとか、落ち込んでいるとかではなく。気づかれないようにと肩で息をするその様は、むしろ二人の行為で限界に近かったことを物語っている。

けれども、もはや張り詰めたものは何もない。「あーあー」とため息をつきながら、ボタンと背中から倒れ込んだ。コンクリートの屋上に危うく後頭部をぶつけそうになるも、すんでの所で落下速度を緩め、膝を折ったまま器用に寝転がる。火照った頬に、秋風が心地よい。天高く浮かぶ雲の、真白が眩しい。はずだったのに、視界には突然影が落ちた。

「今のはお前が悪いぞ」

屋上には桐子と綺月の他に、もう一人、秋の日差しを楽しんでいるものがあつた。

「なんでよ？ あんなのいつものスキンシップじゃない。女の子同士なら当然でしょ？」

「俺は男だからハッキリ言うけどな、あんなことされて涼しい顔してられるヤツはいない」

強い口調で言い切った男子生徒は、すらりと伸びた長身を持ち、細身でありながら鍛えられた風のある鋭さを備えている。その鋭さはおそらく、隙のない顔つきからも感じさせるのだろう。明るい日光を浴びてもなお浅黒いその肌、短く無造作な髪、そんなワイルドな造形すら制してインテリめいた雰囲気作る声と口調が、今の桐子をひどく苛つかせている。

「るっさいわね。ヒロは男だからそーゆー邪なことを考えるのよ」
「そうだな。経験のない女に、男のことはわからんな」

「ちょ、ちょっと、何それ？ 私をバカにしてるの？」

「さあな」

桐子にしてみれば悔しいほど、涼しげな顔の青年。穂積博徳、ヒロと呼ばれる彼もまた、高校一年生。桐子や綺月の同級生だ。

そして三人は、友人という関係にある。だからこそ、こんな小競り合いもいつものことなのだろう。

「綺月のことなら私が一番よくわかっているに決まっているの！」

「それは否定しない。綺月と桐子は半ば生まれたときから一緒にんだからな」

「そ、そうよ」

それ故に博徳は、この場の収め方も心得ていた。

「なら、早く仲直りしてこい。これからも一緒にいたいんだろ？」

「言われなくてもわかっているわよっ。今から行くところだったのに、ヒロが引き留めるから行けなかったのっ」

「はいはい、行ってらっしゃい」

博徳の送り出す言葉を聞か聞かないかのタイミングで、桐子

はひょいっと跳ね起き、風のように屋上から消えていった。さっきまでの艶やかさは全くなく、いつも通り、跳ねっ返りのお転婆娘に戻ったようだ。

ぼつんと残された博徳は彼女の後ろ姿を追った後、天を仰ぎ。思うところありという面持ちでいる。

「でもよ、すべてがわかってるって訳じゃ、ないと思うんだよな」
虚空に残された彼の言葉は、誰に届くこともなく、秋風に掻き消された。

階段を一気に駆け下りてきて息を切らせた綺月は、冷たい廊下の壁に背を凭れ、早鐘を打つ胸に手を当てた。

「こ、これは、走ったからであって……」

誰にもなく言い訳をする彼女は、その鼓動が走り出す前から高鳴っていたことを十分に承知していた。

大切なところを誰かに触れられてしまう感覚。実際には「触れられそう」だった未遂とは言え、年頃の綺月が抑えきれなくなるのは当然のこと。けれども抑えきれなくなることを彼女は恐れ、お気に入りの桐子の膝の上をも逃げ出してきた。わずかな理性を除いては、彼女の全てが、その先を期待していたのにもかかわらず。

彼女はむろん、桐子のことを特別に意識しているわけではない。けれども、いや、だからこそ、あんなことされたらドキドキしてしまう。

(だって、最近になるまで、あんなことはなかったんだから)

綺月はどうと思っていなくても、桐子が特別に想っていたらど

うしよう。でも、今日みたいな、綺月に言わせれば過ぎた悪戯がたまにある程度だから、単純に今までのじゃれ合いの延長なのかも知れない。考えても考えても答えは出ない。綺月一人でどれだけ考えようと、その答えは出ようもないのだ。

仕方なく今回も、綺月は答えを出すことを諦めた。そう、ここ数ヶ月で何度か同じようなことがあった。そして毎回、同じように綺月は桐子から逃げ出している。

「ふう、だいぶ、落ち着いたかな……」

顔の火照りが収まり、いつも通りに穏やかな胸の動きになったことを確認し、綺月は壁から離れた。寄り掛かったときには冷たくて心地よかったけれども、すっかり彼女の熱に暖められてしまったのだろう。壁から離れた背中に、逆にすうっと涼しい空気が流れ込んできた。

今日は土曜日だ。昼下がりの学校はすでに人影もまばらで、もはや用のない綺月も帰ろうかと考えている。けれども桐子を置いていくのはなんだか気まずい。だから今回も、ふらふらと校内を歩いているうちに、桐子が後ろから声をかけてくれるのを待っていた。

「私、ずるいよね。気になるのなら、聞けばいいのに」

桐子が何を想い、綺月に触れたがるのか。答えこそ出せないが、綺月には一つだけ心当たりがある。でもそれは大変な自意識過剰で、正解にはほど遠いともわかっていた。現実にあるけれども、稀なことだと桐子も言っていた。綺月と桐子は幼馴染みで、ずっと一緒だから仲良しなだけで、それ以上ではないのだから。それでも、綺月の胸中に可能性が告げられている。あの日から、綺月は変わった。だから、桐子も変わったのかも知れない、と。

まだ中学生だった頃。綺月はある日の放課後、教室のベランダでぼーっとしていた。一緒に帰るため、職員室に呼び出された桐子が戻ってくるのを待っていたのだ。

綺月たちの教室は一階の一番端っこで、ベランダと呼ばれていたそれは、よく言えばテラス、要はただ単に地面から、裏庭から一段高くなっているだけの場所だった。そこで綺月は、幸運と不運が緋い交ぜの、大きな転機を創り出す一言を聴かされる。

「もしよかったら、その、付き合ってくれませんか」

ベランダからは死角にこそなっていたが、ごく近くの校舎影から、おそらくは左手の角の向こうから、男の子の声が聞こえた。声に聞き覚えはなく、「またか」程度に綺月は思いながらも事の成り行きに聞き耳を立てる。

学校という空間は当然のことながら、いつどこにいても、誰かが通りかかる可能性のある場所だ。そもそも先生によって生徒が管理されるところなのだから、妙な隠れ場所などないのが当然である。さらにこれだけの人間がいたら、それぞれが様々なところを歩き回っている。しかし、これだけ大きな建物だからこそ、偶然あまり人目につかない死角も生じる。それが綺月のいるベランダから見ると左手の、校舎の東側面に当たる場所だった。

故にここを恋の告白に使う生徒は少なくなかった。幸か不幸か、ほとんどの生徒が、ある教室のベランダからその声がよく聞こえてしまう事実を知らず、告白に最適の場所だと思っていたのである。今度の男子生徒も、隠れて告白しているつもりなのだろう。

綺月に立ち聞きの趣味などないが、何とはなしにベランダにいることが少なくなかったため、すでに数回、悲喜こもごもの現場を聞いてきた。

(勝率は五分五分、さて今回はどうなるかな)

多少の興味は否定できないが、ただの暇つぶしだった。

「ごめんなさい。お受けすることはできません」

その声を、聴くまでは。

幸いにして告白を断った声は、綺月が想っていた先輩の声だった。学年が違い、決まった接点があるわけでもなかったため、声だつて頻繁に聴いていたわけではない。それでも間違ひなく先輩の声だと、綺月には確信できた。

他人事だったイベントが、突如我が身の上のこととなり、二の句を待って固唾を呑む。先輩が自分以外の誰かと付き合う、最悪の事態は避けられたけど。だからって喜べやしないんだと、綺月にはわかっていった。他に好きな人がいるのなら、綺月にとっての悲痛な宣告であることに変わりはない。

「あの、私も勇気を持って言います。あなたのことが嫌いだからお断りしているではありません。特定の誰かが好きというわけでもありません。でも、その、えっと、妻く言いにくいんですけど、私、女の子が好きなんです。だからあなたがどんなに素敵な方でも、私はあなたを『恋愛』という意味で好きにはなれないんです」
宣告は免れた。先輩の口が紡いだ科白は、希望の光となった。

佐川綺月は、改めて、恋をした。

この恋が叶いますように。本気でそう願う、恋をした。

あのときから、二年が経つ。

先輩への想い、先輩とのことを相談された桐子は、綺月をいろいろと助けた。ちょっと無茶苦茶だったけど、おかげで綺月には、今や先輩の前に出てもそれなりの女の子でいる自信もついた。

(そうだよ、桐子のおかげで、こうしていられるんだもん)

綺月は二年間の思い出の欠片に触れて、自らの考えに過ちを見いだした。

「桐子は変わってないんだよね。私が私になったから、違って見えるのかな。ごめん、あとで謝るから」

冷たく光るリノリウムの床に独りごちて、今度はいつも通り、穏やかに、無駄なくすらりと歩き出した。

(教室に鞆を取りに行つて、桐子に電話して謝つて、一緒に帰ろう)

放課後に学校に残る生徒として、桐子の友達として、綺月はごく普通の予定を立てていた。

まずは鞆を取りに行くべく迎り着いた教室の前で、女の子らしい可憐な歩みを止めた。そして入り口の引き戸を開ける。と。

「あっ」

「……………っ!」

「……………!?!」

(……………ちょ、え、? 何? ……えっと、それって

……………っ!)

言葉にできないどころか、状況の認識すら怪しい綺月の前に広がる光景。予想だになかった光景が、彼女の前に現れた。

制服の胸部をほだけた女子生徒と、その胸に腕を伸ばしている男性教諭。

机の上で上半身を仰向けにした女の子と、今まさに覆い被さらんとする男。

目が合ってしまった笹原先輩と、強い死線を突き刺してくる柚木先生。

「きゃっ、ちょ、やだっ!」

「えっ、あ、ああ、いや、その」

「やめてっ、お願いだからやめてくださいっ」

「さ、笹原、お前さっきまで」

「やだ、ダメ、どっかいってっ」

手足をバタバタさせている先輩と、明らかに狼狽している先生と。

そんな痴態を目の当たりにしてぼかんと立ちつくす、綺月。

綺月はその場にとって明らかに異質で、綺月に見ても理解できる場ではない。想いを寄せている先輩が襲われているところまで頭は回らず。男女が目の前で大変なことをしている、それだけで彼女の思考回路は焼き切れた。

先輩の声をいくつか聞いたあたりで、彼女は気を失い、教室の入り口に崩れ落ちてしまった。

一方、綺月の視線が失われると同時に、笹原紅深は鋭く右足を蹴り上げ、つま先が男の頤を捉える。次の瞬間、男は半ば蹴り飛ばされ後ずさった。すっくと寸分の震えすらなく上半身を起こした彼女は、揺らぎのない正確無比な呼吸で言葉を口にする。

「いつまでその粗末なもの出してるのかしら」

まるでそれは、恐怖がひたひたと迫り来るかのような声色を伴っていた。彼女の威圧感に男を圧倒している。

今にも交わらんとする距離から刹那一撃で身丈一つ半の間合い

を作った彼女が、少し前まで男に組み敷かれ、襲われていた女の子であるとは俄に信じがたい。男は男で手足が戦慄き、先ほどまでの蛮行とは縁のなきような青ざめた顔である。

「え、あ、そ、その」

「早くしまいなさいと言ってあげてるの、わかる?」

「いや、だ、って、お前」

何かしらの反応を返している男の声など意に介さず、彼女はブラウスのボタンを留め直す。その上に着たままだったブレザーの衿を再び整え、ボタンまで留めると。綺麗すぎる冷淡な表情のまま、口を開いた。

「せっかくの忠告を無視すれば、それ、二度と使えなくなるわよ?」

自身が忠告と呼称した警告が脅してはなないと伝えるべく、机の上からずりりと滑り降りて、男に歩み寄る。動きはまるで精密機械のように正確で素早く、右手はいつの間にも男の性器をとらえていた。

「早くしなさい。それとも、私の手でイきたいのかしら」

己が性器をつぶされかねない状態まで圧迫されていることを感知した脳が、彼の身体に下せる判断は数少ない。故に当然、降伏という選択肢を選び、弱々しい声を吐き出した。

「あ、ああ、わかった、わかったから放してくれ」

「ったく、とろいヤツね」

慌てふためき警告に従おうとする男の性器を、彼女はこともなげに放った。

男はそのことに相当安堵したようで、己の大切なものをそくさとストラックスにしまい込んでいる。しかし次は何をされてしま

うのかと怯えた目で彼女を捉え続けていた。

彼女はすでに男などに興味はないらしく、その場にいるもう一人の人間、綺月の元へ歩み寄り、抱き上げようとしている。

「ごめんなさいね。今、保健室に連れて行ってあげますから」

全身の力が抜け、くっつと横たわっていた綺月に、彼女は語りかける。

もちろん応答はなかったが、代わりに綺月を迎えに来たはずの聲が、紅深の頭上、教室入り口で響いた。

「ちょ、ちょっ、どしたの？」

綺月の後を追いかけて教室にやってきた桐子には、現前の状況が今ひとつ理解できずにいた。

不自然な格好で横たわった綺月。彼女の恋する紅深が綺月を心配そうに見つめ、頬にその手を添えている。奥にはなぜか、怯えるような表情の男、教員である柚木が立ちつくしている。桐子に理解できないのはさもありなんと言った光景だ。

「あ、あの、ごめんなさい。事情はあとで説明しますから、佐川さんを保健室まで連れて行っていただけませんか」

紅深は顔を上げ、桐子に視線を移してお願いする。

深く吸い込まれそうな、大きくて真っ黒な瞳。これ以上はないと言っほどのコントラストを生み出す、真っ白な肌。現況の原因を知らぬ桐子は「こんな可愛い人、私でも惚れそう」と、この場には似つかわしくない、素直すぎる感想を頭の中に浮かべながら。

「あ、はい」

紅深の依頼をすんなりと受けた。しかしさすがに妙な状況は気になるらしく、言葉を続けている。

「でも、どうしたんですか？ 綺月。さっきまで元気でしたけど

……」

「原因はあとで説明しますので、とにかく今は保健室で寝かせてあげてください」

「わかりました」

事情を知らぬ桐子は、何の疑いもなく綺月を持ち上げる。お姫様だっこをしようと抱きかかえたが、気を失った綺月の頭部は重たく、だらんと垂れてしまった。さすがにこれでは首がどうなってしまうかわからない。そう判断して綺月を床に戻し。彼女は反対側を向きしゃがみ込むと、首を捻り、背部にいる紅深に補助を求めた。

「えっと、済みません、私の背中に乗せてもらえませんか」

「あ、そうですね。ごめんなさい気づけなくて。……っと、これで、よろしいでしょうか」

小柄な紅深であったが、依頼に応じて難なく自分より大きな綺月を抱き上げ、桐子の背中に乗せる。背面にしっかりとした重さを感じた桐子は、特に重さを感じさせることもない軽快な態度で立ち上がり、紅深の方へと向き直り言った。

「はい、ばっちりです。じゃあ、保健室行きますね」

「済みませんが、お願いします。私もすぐに行きますから」

一人を背負いながらもいつも通り歩く桐子に「本当に、済みません」と呟きながら、ゆっくりと身体を反転させる。彼女の瞳は鋭さを取り戻すと、怯えきり次の行動が失われていた男に、その切っ先を再び向けた。

「この下衆が。まだいたか。早く帰って辞表でも用意したら？」

紅深は男の答えなど期待することもなく踵を返すと、教室を出て、すでに見えなくなった二人の後を追った。

「北野先生いなかったから、とりあえず寝かせたけど、大丈夫でしようか？」

「気を失っているだけだからそれで大丈夫だと思います。ありがとうございます」

存外に落ち着きを払っている桐子に内心驚きながら、紅深は答えた。

すでにベッドに寝かされた綺月の隣で、心配そうに彼女を見つめる桐子。口ぶり同様、過剰に慌てた素振りはない。

(ひょっとして、佐川さんはよく倒れる子なのでしょうか)

ふと脳裏を掠めた予想にそんな好都合などあるまいと思いつき、紅深は慣れから来る落ち着きを持って、綺月の胸元に手を伸ばす。紅深の真っ白な手が、真っ赤なリボンを解き、ブラウスの首元を緩めている。

「あっ、そうですね、リボン解いてあげた方がよかったですよね。ごめんなさい。気づきませんでした」

「そんな、気にしないでください。落ち着いて寝かせられただけでも凄いいと思います。こういうことに慣れてるんですか？」

「え、あっ、いや、全然。よくわからないから、とにかく寝かせようって、それだけで」

紅深との会話で少し平常心を取り戻したのか、桐子は逆に慌てた。

(落ち着いていたわけではなく、とにかくベッドに運ぶだけのを完遂させただけなのですね)

桐子の様子を見ながら紅深は普通の状況に満足し、後退りに一

歩、二歩とベッドサイドを離れた。

「事情をお話したので、いらしてください」

紅深は桐子に目配せをする。

気を失っているは何を言われてもわからないだろうが、その原因を本人の前で話すのはためらわれる。彼女の当然の配慮に、桐子も難なく察しがついた。

「はい」

紅深の後を追いつ、桐子もベッドを囲む真っ白なカーテンの外へと出て行った。

紅深の事情説明はあっさりとしたものだった。

「私が柚木先生にレイプされているところを、彼女が偶然見えました。私がつまづいて倒れてしまいました。ごめんなさい」

明快な説明は桐子にもすぐ理解できたが、どうしたって引っかかるのは綺月が見た現場のこと。聞いてしまった方がいいものかわかりかね、迷ったように視線を泳がせていた彼女に、紅深はこれまたあっさりと言いつ放った。

「私が襲われたという点は、あまり気になさらないでください。それはそれで、別途処理すべき問題ですから」

「え、あ、でも……」

見てはいけないものを見るかのように、少し俯いた桐子は上目遣いで、ちらりちらりと紅深の様子を覗いている。女の子にとって、男の人に襲われることほど怖いことはない、桐子には思えた。それ故にあれこれ考えて、口の開きようがない。まさにか

る言葉が見つからない。

桐子自身が同じく、純潔が失われかねない状況に陥ってしまったら、もう、どうしたらいいのかわからなくなってしまうだろうと思われた。正しく泣ける自信もない、ただただ、錯乱してしまうんじゃないだろうか。けれども、目の前の紅深は事も無げに落ち着ききっている。

（男の人に慣れているのかな？ でも、先輩って女の子が好きなんじや？ それならなおのこと、男の人に襲われるなんて嫌だと思っただけ……）

あれこれまともな考えを巡らせる桐子を察したかのように、紅深は話題を変えた。

「自己紹介を忘れていましたね。私は笹原紅深、小さいですけど一応二年生です。よろしければ、あなたのお名前も教えてくださいませんか」

「あ、はい。森田桐子、一年A組です」

「ありがとうございます。よろしく願いますね、森田さん。それで、その、森田さんが驚いて心配してくださるのは嬉しいのですけど……。未遂でしたから、気にしないでください。あんな光景を見させてしまったことこそ、申し訳ないと思っています」

うっすらと優しい笑みを浮かべた紅深、その事態を全く理解できない桐子。だって襲われたんだよ？ 危なかったんだよ？ と、桐子の胸には紅深に代わって怒りが湧き溢れそうですらあったのに。

そんな彼女の思考は口に出ないまでも、どこことなく顔やら様子やらには現れていて、逆に紅深が、どうしたものかと少し困った表情をしている。そして仕方なしと話を続ける。

「私、何年前かに、殺されそうになったことがあるんです。刃物突きつけられて。それに比べたら命は無事なんだって、落ち着いていられたんです。だから、その、あんまり心配しないでください」

とても本当とは思えない軽い語気に、とても嘘とは思えない穏やかな表情に、桐子はもう驚くことすらできない。

（嘘だろうと本当だろうと、こんなことを言えるのって、あり得るの？）

言葉の真偽を、彼女の心理を桐子は評価し得なかったが、「心配させないように」という優しさだけは本物なんだと感じ取った。

「綺月さんのこともあと私が責任を持ちますので、どうか、お帰りを促す紅深の瞳は、凄く優しく、まっすぐ桐子だけを見ていて。だから綺月は、この人を好きになったんだなと、桐子はふと納得してしまった。

（あ、そうだ。綺月は先輩のことを好きなんだよね。だったら、私はやっぱり早く帰った方がいいんじゃない？ だって二人きりのチャンスだよ？）

衝撃の告白に気を取られ、今更ながら重大な事実気づいた桐子は、紅深のことが気にならないわけでもないがひとまず彼女の提案に乗ることとした。

「それじゃあ、その、綺月のこと、お願いします」

「お任せください。目を覚まされたらおうちまで送って差し上げます。森田さんも帰り道、気をつけてください」

「はい。では、失礼します」

「では、また、後ほど」

保健室を出た桐子は、外光の差し込まぬ廊下を複雑な思いで歩

き出した。

でも、彼女はそんな複雑な思いに悩まされるような性格ではない。三歩歩けば嫌なことなど忘れて、とはいかないけれども、すぐに前向きに考えることはできる。

(とにかく結局、綺月にとってはチャンスだよ。しかも綺月と先輩がうまくいけば、先輩だってきっと幸せになれるよね)

さっきまでの難しい顔はどこへやら、今、保健室で起きているであろうことが、まるで我が身のことのように頬を綻ばせて。

「それって完璧っ」

桐子の歩みは弾み始めていた。

一方、保健室では。紅深が一人で、綺月を見つめ続けていた。

彼女はまだ目を覚まさない。

「ごめんなさい」

無表情が有する口から、自身にしか聞こえぬかすかな声が漏れた。

しかし彼女を想う彼女には、それが聞こえてしまったのだろうか。まるで声に誘われるかのように、臉をあげた。

(……………?)

眼前に広がるは、クリーム色の天井。真っ白なカーテン。

彼女の身を包んでいるのは、やはり真っ白な布団。

(……………布団? あれ? 私、寝てた?)

「おはよう、佐川さん」

綺月は声のする方に顔を向け、ベッドの横で紅深が微笑んでいるのを認識した。と同時に、ただでさえ状況を理解し切れていな

かった彼女はますます訳がわからなくなる。

「ちょ、えあ、あ? 私、どうして?」

「落ちていて、ね?」

とにかくベッドを出ようと掛け布団の端を掴んだその手に、好きな人の真っ白な手が重なる。温かで柔らかな手は未経験の感覚をもたらすとともに、綺月の混乱を悪化させてしまう。

「えっあえ、でも、その、私、えとっ」

混乱のあまり、今まで落ちて着いて見つけることすら叶わなかった御手を、ぎゅっと握りしめてしまひ。

「えあーっ、ご、ごめんなさいっ」

もっと慌てて手を振り解いてしまひ。

「あ、えとあう、そんなつもりじゃなくてっ」

目の前でいよいよ收拾がつかなくなっている綺月を、紅深は見ると見かねていた。けれども呆れている風ではなく、少し穏やかで、少し困った、優しい笑顔を湛えている。だから特に他意などないのだからうけど。

「大丈夫ですから、落ちていてください」

半身を起こした綺月の右腕を、紅深はその身を屈めながら左手で捕らえ引き寄せる。当然すうっと、綺月自身も紅深に引き寄せられた。

「えっ」

綺月があげた小さな声はすでに紅深の右耳横で放たれ、気づけば彼女は、紅深越しの風景を目にしていた。淀みなく背中に回される紅深の右腕。そして綺月の上半身は、紅深にすっかり抱かれていた。

「大丈夫ですから、ね?」

綺月の右耳から響くは、あのときと同じ声。恋を決めた、あの、声。でも、全然違う。夢にまで見た、いや、夢でしか聴けないと思っていた甘い声だ。けれども夢で聴いたのよりずっと甘くて、綺月の身体の緊張は一気に溶かされていく。

どれだけそうしていたのだらう。綺月には一分か、二分か、もつとかに感じられていた。しかし実際にはわずか数秒の後、ふっと腕が緩み二人の胸が離れると、目睫の間に視線が向き合う。紅深の瞳にはまだ驚いている顔が映り、綺月の瞳には想像の及ばぬ笑顔が映った。

「それじゃあ、帰りましょうか」

なんだかよくわからないけど、何の不思議もなく。不自然なはずの紅深との距離すら、今の綺月には自然に思えた。確かに胸は高鳴っているのに、なぜだらう。まるで魔法にかかったかのよう、その返答すらあっさり口をついて出た。

「はいっ」

「佐川さん、どちらの電車に乗られるのですか？」

学校の最寄り駅、上下線を分かつプラットホームの上で紅深が問うた。

もちろん二人で帰ることは初めてで、お互いがどこに帰るかも知らない。分かれ道でありがちな、ただのおしゃべりと言った風情だ。

「私は一番線の方です。先輩は？」

「そうですね。では私も一番線ですね。さ、ちょうど来ました、乗りましょう」

多少は紅深との会話にも慣れてきたのか、綺月はそれなりに答えを返し、目の前に滑り込んできた電車に二人で乗った。

土曜日の午後、中途半端な時間。電車の中はガラガラで、二人揃って、長い座席の端っこに座った。女の子二人の下校風景。それだけであればなんてことないものの、どうも雰囲気がちない二人は、端からどのように見えていただろう。身長差故に上級生に見える綺月が後輩に見える紅深に恋しようとは、よもや誰も思うまいが。

「佐川さんって、お静かな方ですね。女の子らしくて羨ましいです」

紅深の言葉は誰が聞いても、たわいないおしゃべりだったけれど。

会話に慣れたと言っても所詮は多少で、受け答えが精一杯。想いを寄せる笹原先輩に自ら話しかけるなどできっこない。そんな胸中が見抜かれたようで、綺月は慌てふためいてしまう。

「えっあ、そ、そんなこと、ないんですけど。その、緊張しちゃって、あっ」

「人見知り、ですか？」

「そ、そうなんです。初対面で話すの、あまり得意じゃ、なくて」

つい明かしてしまった緊張の理由を察せられなかったことに綺月は安堵する。しかし優しく思いやりに溢れる紅深の笑顔は、見抜いているともいえないもつかないものだった。

「それじゃあ、次はもっとたくさん、お話ししましょうね」

「は、はいっ」

こうして言葉少なに十分そこそこ経ったとき、綺月は自らの下車駅が間近であることに気づいた。そして今は正直、ほっとした。

「ずっと一緒にいたかった人と、隣同士でおしゃべりしている。もちろんその状況は飛び上がるほど嬉しかったけれども、おかげさまで心臓も飛び上がりそうである。鼓動は未だに速く、気づかれないかと手に汗握る状態で、もう一瞬たりとも保ちそうにない。電車内で流れる停車駅のアナウンスに感謝しつつ、彼女は先が見えた落ち着きを伴い口を開いた。この電車で、彼女から話し出したのは初めてだった。

「あの、私、次で降ります。今日はご迷惑おかけしました。ありがとうございます」

座席に座ったまま身体を紅深の方に捻り、軽く頭を下げる。駅が近づき、速度を緩める電車の慣性に任せ、綺月は頭を上げて正面に向き直る。そしてゆっくりと立ち上がり、後ろを振り返りもう一礼。しようとしたけど。

「偶然ですね。私もここで降りるんです」

首を小さく傾げてにっこり笑った、夢のような笑顔に困惑した。電車を降りてからの帰り道、秋の斜光が、すぐ隣にある顔に切なげな光と影を生み出していた。

どこまで一緒にの帰り道なんだろうという疑問も多少はあった。しかしアンバー気味の逆光に彩られた彼女の微笑みは、綺月が経験したことのない美しさで、つい見とれてしまう。もはや他のことは考えられない状態。だから紅深がふと、綺月の方に瞳を向け口を開くまで、自分がどれだけ見つめ続けていたのかすら気づかなかった。

「ふふっ、なんですか？ 私の顔、何か付いてますか？」

「えっ、あ、そんなことありませんっ。ただ、その、あの、」

「あ、ちっちゃいなーとか思ってたんですけどね？」

「ちが、いますっ、だから、え」と慌ててそっぽを向き視線を逸らす綺月に、わざとらしく戯けてみせた紅深はびんびんと数歩のステップを早めて、対峙。くつと目遣いになり、二人の歩みを止める。

「いけませんよ？ バカにしては。これでも私は先輩でお姉さんなんですからね？」

言葉を終えるか終えないかで、桐子の両手が綺月に伸びた。衣擦れの音だけが響くかのようなたおやかな動きは、首に回した両手が綺月を桐子に引き寄せ、つま先で背伸びした華奢な脚が桐子を綺月に押し寄せた。

「だから、こんなこともできちゃうんですよ？」

「——っ!？」

眼前に迫った紅深の顔に、また意味不明な言葉を口にするところだったのだが。綺月の口は声を発せぬ状態になってしまった。温かくて柔らかな、粘膜の重なり。綺月の唇は触れたことのない感覚に制され、ぐちゃぐちゃだった頭の中は一瞬にして真っ白になった。

唇を触れあわせるだけの、淡い行為。紅深は時間を巻き戻すかのように踵を地に着け、両腕を解いた。数秒前に戻った二人の間で、薄く紅潮した紅深の頬だけが、時の流れという事実を語っていた。

「ほうら、帰りましょう」

その言葉で綺月が意識を戻した頃には、紅深はふふっと小さく笑い、くるりと背を向けて綺月の数歩先を再び歩み出していた。

からかうのが楽しくて仕方ないと、彼女の背中には大きく書いてあったのだが。不慮の事故に出くわした綺月が解しうるはずもない。驚きや困惑を言葉にはおろか声に出すこともできず、口をパクパクさせそうな彼女ができることは。精一杯に自らを奮い起こして、追いかけるだけだった。

そして一歩を踏み出したとき、ブァッと強い横風が吹いた。

綺月は咄嗟に、次の行動を取る。

女の子なら誰でもそうだろう、条件反射だ。

顔を伏せながらも、空いていた左手で短いプリーツスカートを押さえようとする。しかしあまりに突然の強風は防衛行為に及ぶ間を与えず、パンツは丸見え。

「きゃっ」

紅深に見られてしまっただろうと思い、もっと可愛いのを着けてくればよかったと後悔しながら、その手をスカートの端に伸ばした。

もちろん紅深も瞬時に次の行動に移っていた。綺月よりも、よほど早く。速く。まるで予期していたかのよう。

しかし動きが、女の子のそれではない。後ろに倒れ込むようにしながら踵を返し、上半身を捻って右肩を真後ろに向ける。次の瞬間には右脚を軸に小さく左脚を振り回し、身体を綺月に正対させると、今度は左脚を着地させ右脚をアスファルトから離す。綺月と虚空を両睨みする瞳は、先ほどまでの温かみを失い、ただ眼球が存在するだけといった無表情さに一変した。

視野の下半分で捉えた綺月は、顔を伏せ、スカートに手を伸ばそうとしている。彼女が女の子であってよかったです、紅深は予想よりも若干良好な現状に満足しながら、左脚にも地を蹴らせた。

同時に、はためていたスカートは完全にめくれ、ペールブルーのパンツが日の光に照らされる。しかし、全く気にする様子はない。

「無礼なられたものだな」

それどころか場に似つかわしくない眩きを風の中に投げ、一気に間合いを詰めた綺月の右脇に、自らの左腕を差し込み抱えるのと、同時に右手の掌を思いきり開いて虚空に突き出した。

視野の上半分で捉えていたはずの秋空は今や変わり果て、不自然に輝度を増していた。まるで雹が大量に降り注いでいるようだったが、その一つ一つの白い「何か」は固まりでなく、光の大粒が入射角三十度ほどで地表に向かい急進している。よもや避けられないと思われる距離まで掌との間合いが詰まると、紅深の視界は黒く染まった。

彼女の開かれた掌を中心とする空間に、黒い円が広がっている。——魔法陣。そう呼ばれる図形が黒線で描かれたのである。黒いそれに、白い光は根こそぎ飲み込まれた。

一瞬の後に光が消え去る頃、黒い円形も消え去り、すっかり平穏な秋空と帰り道に戻った。紅深は地から離れた両脚を綺月の半歩向こうに着地させると、絡ませていた右手を彼女の腰にあてがい、グッと強く自身の方へと引き寄せた。二人の間には身長差が十五センチあり、綺月のおとがい紅深の形のいい頭が収まる格好となった。それ以前に、二人は抱き合う格好となっていた。

手遅れながらもスカートの端を押さえた綺月は、安堵の間もなく身体に生じる違和感に気づいた。何と言うか、締め付けられるような感覚。不思議に思いながら、強風のあまり瞑っていた目を開き、伏せがちだった視線を正面に戻そうと持ち上げる途中で。

予期せぬものが目に入った。

「ふえ、あ、えと」

「大丈夫？ 佐川さん」

自分の胸元からひょっこりと出された笑顔の前に、綺月はまだ、気を失いそうでした。

「佐川さんがふらついていたので、また倒れてしまうかと思いい支えてしまいました。ごめんなさい」

むしろ今の方が倒れてしまいそうな綺月を、紅深は腕の中から解放した。それはあまりの強風に驚いて、後輩が先輩に抱きついたあとの光景に見えなくもなかった。しかし後輩に見える紅深の、腕を緩めながら身体を引く一挙一動にはあまりにも揺るぎがなかった。逆に先輩に見える綺月は、立っていることに精一杯なのがあらさまである。

「え、あ、ありがとうございますっ」

綺月してみれば、キスのあとの、抱擁。前者はともかく、後者はその形容するだけのロマンチックな状況ではなかったが、伏せた目が周りを見ていなかったことを物語っている。態度からそれを読み取った紅深は、その安堵を悟られぬようあっさりとした言葉を続けた。

「さて、と。その『佐川』という表札、佐川さんのおうちですよね？」

「は、いっ。そうです、あの、その、それじゃあ私、これで失礼しますっ」

べこりと素早く深々お辞儀をすると、後ろ髪ではなく前髪でも引かれたかのように、綺月は落ち着きなく自宅へと入る。ドアの向こうに消える直前、もう一度、あたふたとお辞儀をした。

「それでは、また明日」

すでに家の中に入ってしまった綺月には届かぬが、穏やかな所作で紅深は挨拶を返す。

しかし顔をあげたときには再び、温もりの失われた、深遠な冷たい瞳が現れた。何食わぬ顔で歩き出しながらも、研ぎ澄ました全身の感覚で死角方位の状況を探る。幸いにして、綺月の視線も、向かい家にいるはずの桐子の視線も、誰の視線も感じない。

(周囲への配慮が最小限で済むなら、一気にけりを付けてもいい。が)

一歩一歩の送りは寸分変わらず、歩みと交差して振る両腕も正確な反復運動。紅深の細い身体には似つかわしくない安定しすぎた動きを伴い、数十メートル進んだ一ブロック先の角を右折した。そこで彼女は、赤煉瓦風の民家の塀に向かい、言葉を放った。

「バレていることも、逃げられぬ事も、気づいておろう？ 姿を曝さねば、誤って急所を刺してしまうかも知れんな」

冷たい表情で紡がれたその科白は、不自然に空気に吸い込まれるようだった。場の緊張感がそうさせているのか、彼女の声以外に、全く音が聞こえない。彼女の話し相手と思われる塀からも、何の反応もなかった。

「ほう、上の命令ぐらいいは聞けるものが来たか。しかし命は惜しいだろ？」

フィクションではおなじみの、現実にはあり得なような脅しを壁に吐く少女。知らない人が見たら、いや、事情を知っている人などいないだろうから、誰が見ても妙なシーンだ。しかし彼女が、例えばちょっと頭の弱い子だったり、早すぎる飲酒により酩酊状態の子だったらどんなによかったことだろう。

数秒の沈黙の後、紅深の右手はいつの間にか白刃を握っていた。

「そうか、応じぬか。ではまず、その迷彩と腕一本を切り落としてやろう」

最後通牒を突きつけてもなお、わずかな猶予を与えたのは彼女の慈悲か。余裕か。

おそらく、後者であったのだろう。右手から伸びた切っ先がわずかに動いたかと思うと、次の瞬間壁から教センチの手前を切り裂き終えていた。

——ボダッ

何か重量物が落ちる音とともに、紅深の前には一人の男の姿が現れる。年の頃二十歳ばかりと言ったところか、彼女よりも若干年上そうな、長身の男。彼女が小柄なので余計大きく見えるはずだが、場の雰囲気は、紅深を大きく見せていた。男はまるで、蛇に睨まれた蛙である。しかし表情に怯えは見られない、絵に描いた顔でも貼られたかのような無表情さだ。

目の前の男が動けないことは明らかであると言わんばかりに、紅深は後頭部をがら空きに少し屈んで、重たい音を立てて落ちた何かを拾い上げた。それは、拾い上げた彼女の腕にそっくりなもの。人の、腕。しかしそれは人の腕ではなからう。なぜなら、切断面は真っ白で、したたるべき赤い液体は寸分も見られないのだから。

腕のようなものを左手で持ち上げ、彼女は再び、目の前の男を見据え、ゆっくりと話し出した。

「人間の格好をするなら、血液はもちろん、心も入れておいた方がいい。上長様に伝えておけ」

極めて平然と、冷たい表情のまま。

「所属を聞きたいところだが、その様子だと言えないのだろうか？ 安心しろ、無為な殺生はせぬ。尤も、お前が生き物かは疑問だが」

強くも弱くもない、ただ言葉通りと言った語気で。言わんとしていたことを伝え終えたのか、紅深は左手に持っていた重量物を目の前の男に投げ返す。そして身体を右に転じ、去りに際に言葉を放った。

「お前はそれでいいのか？ 彼女を幸せにしてやりたくは、ないのか？」

「……………」

男は紅深の背を見ながら、わずかに動いた。しかし反撃はおろか返答をすることもできず、離れていく彼女に、終始通した沈黙を返すのみだった。

一方、重くも軽くもなく当然に歩を進める紅深は、さっきまでと違い表情を崩している。少し悲しそうで、右手に持つ刃とは不釣り合いな、女の子らしい表情。

(罰でも当たったのか。いや、まさかな……)

自らの思いつきを否定するかのように顔をぶんぶんと左右に振りながら、右手の白刃をくるりと回すと、すっかり元通りの彼女に戻った。抜き身の変わりに今時珍しい革靴を提げ、穏やかな笑顔を身につけ。

「あーあ。おかげで『実は逆方向なんです』って告白し損ねてしまいました」

快晴の秋空に、高校二年生の少女がぼかんと呟いた。

あとがき

ハッピーバレンタイン。という挨拶が適當なのかな。Fukaponです。

あとがきの挨拶と言えはここ数年「お久しぶりです」が定着していましたが、振り返ってみると昨年は五本も書いていて、それこそ久しぶりに「またお会いしましたね」みたいな挨拶ができるようになりました。今年もこの勢いで、と思ったのもつかの間、この原稿はギリギリと言うより間に合っていない状況でのリリースとなりそうです。ごめんなさい。

ちゃんと付いたタイトルが別物で、バツと見気づきませんが、本作は『それりゆ(仮) Community Technology Preview』として昨年十一月に出したお話の完成版(?)です。筋はそんなに変わっていませんが、キャラ設定の変更や描写の修正を行っていて、文字数は五割も増したらしいですよ。そのほとんどがどこにつっこまれたかは、お察しください(笑)。

今年の目標が変に実行されて、無意味にちよとエッチなシーンが入ったなあという感もありますが、いや、ちゃんと意味あるんですって。ちよと不自然なところとか、伏線ですよ? 多分。た、多分じゃなくて、ちゃんと考えてますって、きつと。

私が書くお話で明確に「エッチなシーン」を書くのはこれが初めてなんですが、どうなんですかね。読んでくださっているのがどんな方々か(そもそもいるのかって話も含め)わからないので、

反応の予測もしようがないのですが……。百合でエロっつーと商業でもジャンルとしてはなさげなので(需要が低く儲からないのでしょう)、希少性からはありなのかなとか考えたりもしています。まあ、これに関しては「エロ」というほどエロくもないんです。その辺もあわせて、意見とか感想とかももらえると嬉しいです。

正直なところ二巻以降の展開を全く考えていないので、どうしたものかなあと思っただけはします。「非現実が入ってるお話が書きたい」という思いつきで途中まで話を作って書いたものなので、ねえ。とりあえず魔法少女満載で、触手とか絡めてみるか。とかいろいろ考えて何とかします。五月(と断言切っているのか?)のコミティアでまたお会いしましょう。

ふうむ、いつもあとがきだけはすらすら書けるんですが、今日はどうもダメですなあ。

二〇〇八年二月、積まれたあれこれに囲まれて。

恋果て止めて (1)

Fukapon

2008年2月10日 初版発行

発行所 まにふいくみやほか

印刷／製本 project KAIGO 東川口分室

Copyright (C) 2008 Fukapon <fukapon@projectkaigo.org>

<http://www.projectkaigo.org/>